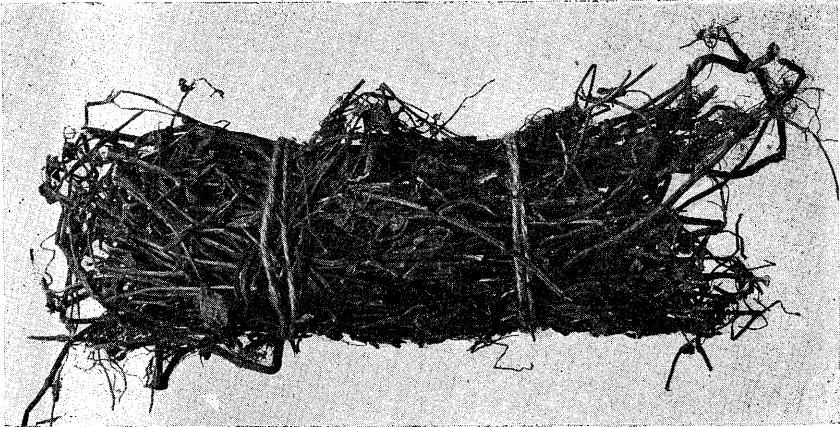


72. 及び、それに基いたと思われる川上瀧弥氏の台湾植物目録 (1910) に *M. procumbens* Hensl. = 仙草と出ている。これには従来ハイセンソウ、ハイメソナ、タイワンセンソウの名があり、早田博士のヒメセンソウ *M. elegans* Hayata (松村・早田: Enumeratio Plantarum Formosananarum: 306 (1906) は異名として扱われている。



Mesona chinensis sold at Bangkok as drug. バンコックで涼粉草の名で市販されていた生薬

○コミヤマキンボウゲの発表に関して (水島 正美) Masami MIZUSHIMA:
Concerning the publication of *Ranunculus yuparensis* Miyabe ex Toyokuni.

本誌 28; 251 に豊国秀夫氏がコミヤマキンボウゲ (*Ranunculus yuparensis* Miyabe ex Toyokuni) というものを発表され、ミヤマキンボウゲやケナシミヤマキンボウゲ (*R. subcorymbosus* Kom.) に近い別種と考定された。此所には其の taxon としての価値如何を論ずるのではなく、主に発表形式に関する疑問に就いて指摘したい。

コミヤマキンボウゲの正基準標本は石狩夕張岳 (Aug. 8, 1912, H. Yanagisawa) のものである。これと多分同一標本と思われるものが宮部・館脇先生の北日本植物誌料 (6) のケナシミヤマキンボウゲの下に引用されているのである (Mt. Yûbari, Prov. Ishikari (H. Yanagisawa, 1912) とある)。ケナシミヤマキンボウゲの方に引用されたのが別の標本であれば問題はないが、若し同一標本だとすれば *R. yuparensis* の異名として *R. subcorymbosus* Kom. sensu Miyabe et Tatewaki, pro minoribus partibus を掲げるべきである。此の辺の経緯は豊国氏の論文中には触れてないので、読者としては迷わざるを得ず、明確にして戴きたいと希っている。

頗る多形的な *R. acris* 群中の分類には、欧亜北方の材料の広汎精密な比較検討を要することは言を俟たない。極東産の資料ですら不自由な現在、広い基礎の上に立ててミヤマキンボウゲ類を分類するのは困難と思う。尚豊国氏は *R. Steveni* Andr. をミヤマキンボウゲに当てられるようであるが、根茎を造らぬ邦産のものを比較的長い根茎を有するという *R. Steveni* に当てるのは一考を要すると思う。又ケナシミヤマキンボウゲは *R. acris* var. *frigidus* Regel et Maack と比較する必要がある。其の上にコミヤマキンボウゲの少毛形エジヤマキンボウゲの存在が事態を複雑にしている。

(東京都立大学理学部、牧野標本館)